

# ウィーンの市街地変容におけるリーニエ市壁跡地周辺の空間利用

## Spatial Utilization along the Former Linienwall Area in Urban transformation of Vienna

学籍番号 47-156744  
氏名 蔣 夢予 (Jiang, Mengyu)  
指導教員 出口 敦 教授

### 1. 研究の背景・目的

#### 1-1 研究の背景

多くの欧州城郭都市は中世から近代にかけて、都市の段階的発展に伴う市域拡張の都度、更なる外側へと市街地を囲む市壁を築いてきた。これ等市壁の殆どは近代化の過程で次第に必要とされなくなり、解体された。市壁跡地の多くは道路、鉄道、緑地等へと改造され、今尚環状の都市骨格として都市を形づけている。本文ではこれ等の都市を城郭環状構造都市と定義する。今日のこれ等の都市でその中心市街地を囲む内側城壁跡地における都市改造はほぼ19世紀に完成され、その特質は定型した。それに対し、近代期市街地の外側に位置する市壁の跡地からなる環状都市骨格は今尚時代に応じて変化し、今日的意義が豊富である。

ウィーンの近代化都市改造は帝都の象徴軸として広く知られているリンクシュトラークの他に旧市街外周のリーニエ市壁(Linienwall)を撤去した跡地及び周辺の地帯上に整備したギュルテル(Gürtel)と名の環状線も機能軸<sup>1</sup>として、重要な存在である。



図 1-1 ウィーンの二重市壁の現在位置対象図

#### 1-2 研究の目的

- 1) 欧州の城郭環状構造都市が市壁跡地に環状の都市骨格を形成した経緯及びその都市骨格が今日の都市での多様な役割の解明。
- 2) リーニエ市壁及びその跡地がウィーンの市街地変容に応じて都市骨格としての役割を変化し続けてきた経緯とその両側の環境と社会にもたらした影響を解明する。
- 3) 今日のリーニエ市壁跡地ベルト及び隣接地上で沿線住民の日常生活と関連する多様な公共空間が共有の場所を造りだし、市壁跡地からなる環状都市骨格としての新たな可能性を示していることを検証解明する。

<sup>1</sup>吉崎真人 木多道宏 吉岡聡司 張海燕, 中東欧の近代都市建設と都市計画に関する研究その1—ブダペスト、プラハ、ウィーンの都市拡張と都市改造—, 平成23年度日本建築学会近畿支部研究発表会 より引用

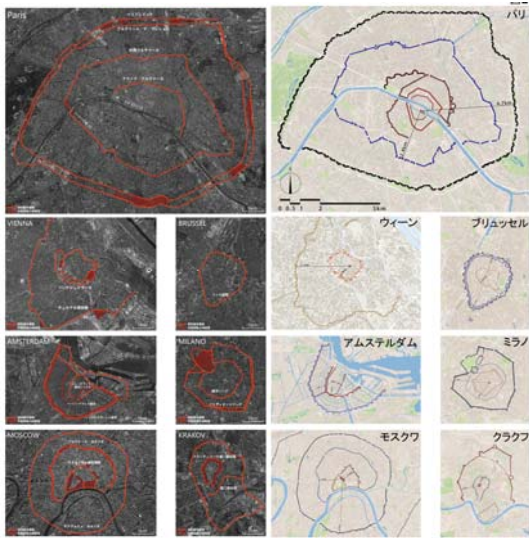


図 2-1 七都市の市壁・都市骨格比較図

## 2. 欧州における城郭環状構造都市の分析

研究の事例として、欧州各地域から歴史、政治、文化的位置づけと人口や都市規模に基き、七つの城郭都市由来の環状構造都市を研究対象として選定した。各都市の市壁が存在した時期及び市壁跡地が都市骨格として存在した時期を表 2-1 の年表に表し、時間軸上の関係からこれら市壁・市壁跡地の変遷を表 2-2 の四つの類型にまとめた。

表 2-1 欧州七都市の市壁変遷年表

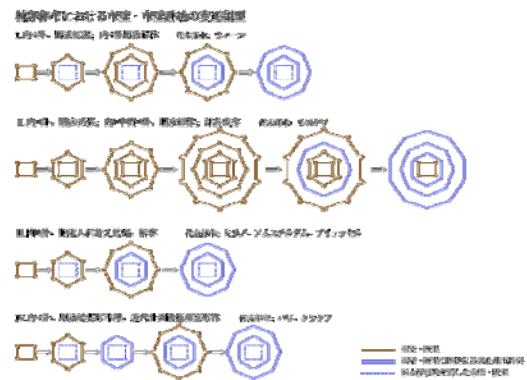
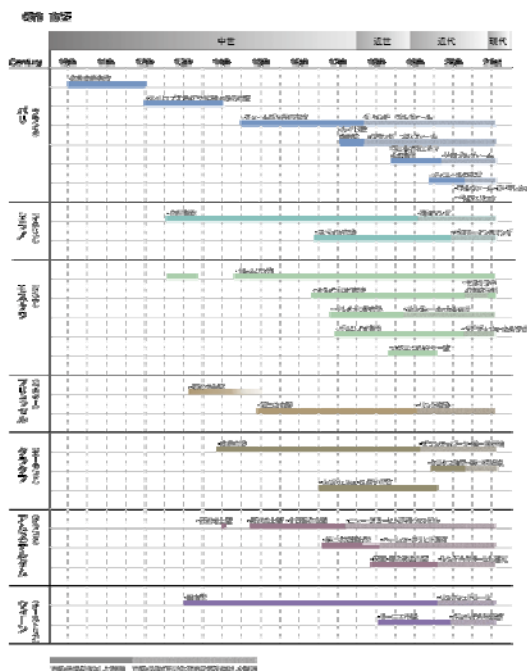


表 2-2 欧州城郭環状構造都市の市壁変遷類型図

これ等の市壁が撤去された後、跡地上の機能はその空間の形式や規模によって違ってくる為、それにちなんで跡地の利用を以下の五類型にまとめた：・Ⅰ市街地と同質化した街路・Ⅱ狭幅員の一般環状道路・Ⅲ広幅員の幹線環状道路・Ⅳ二重幹線環状道路構造・Ⅴ点的な市壁跡地の都市空間としての利用。これ等のまとめに基づき都市の市街地変容における市壁・市壁跡地の都市構造上の位置付けを考察し、市壁の築造と撤去の経緯は都市の歴史や立地によって違うが、市壁跡地の多くは近代都市の形成に於いて、都市骨格として重要な役割を果たした。

## 3. ウィーンの都市形成史から見た

### リーニエ市壁・市壁跡地の変遷

リーニエ市壁をウィーンの都市史の中に置き、その変遷の広義的な意義を考察した。ウィーンの段階的都市発展に伴う市壁の建設、撤去の経緯とその時代背景を年表で整理し、その関連性を明らかにした。リーニエ市壁の役割は建設当時の防御境界から経済的境界としての税関へと変わり、市壁の撤去後は交通インフラの受け皿へと轉身した。近年、移民の流入等によって社会構成がさらに複雑化したウィーンのギュルテル沿線で、リーニエ市壁跡地が成した都市骨格は又と新たな挑戦に直面している。

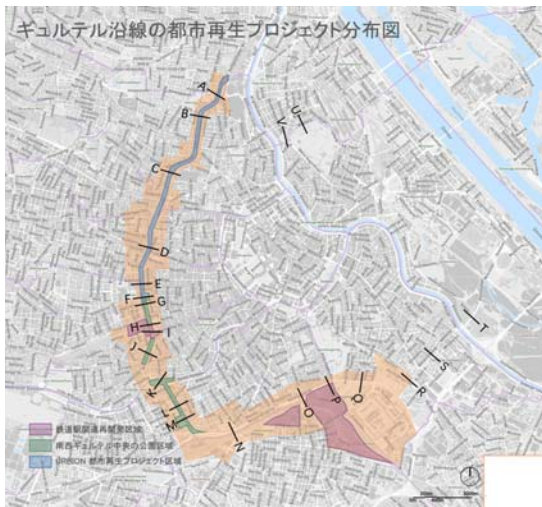


図 4-1 抽出断面箇所と沿線プロジェクトの分布図

#### 4. リーニエ市壁跡地周辺の空間構成

現地調査を通して、リーニエ市壁跡地周辺の空間構成を考察した。リーニエ市壁ベルト（以下「ベルト」と略す）沿線上の空間形態と機能分布、ベルト両側に隣接する建築物や広場等との関連性、リーニエ市壁跡地空間の周辺都市空間全体の中での位置づけから、22箇所 の典型的な空間構成を選定した。その内の18箇所は、リーニエ市壁跡地上のギョルテル環状道路に隣接する14の地区を対象とした「ギョルテル目標プロジェクト」(Zielgebiet Gürtel)の範囲内(図4-1のオレンジゾーン)に位置している。これ等の場所では建築や公共空間の改修を始め、高架下の活性化、歩行者空間と自転車専用道の設置等が行われている。

選定した22箇所の断面をウィーン市政府が提供するStadtplan3d(ViennaGIS)のウィーン市街地3D建築モデルデータ及び地形モデルデータとStadtplan(ViennaGIS)の都市地図CADデータに基き、現地調査と航空写真から得た情報を加えて各断面の図面作成を行った。断面図ではリーニエ市壁跡地ベルト上各機能部分の幅や重要な構築物の高度、両側隣接する建築物の高度等測量した数値を標記し、両側隣接街区との空間関連性を表した。

空間断面の比較を行い、Ⅰ都市鉄道高架型Ⅱ広場一体型Ⅲ中央帯運動施設型Ⅳ隣接公共空間連続型Ⅴ隣接公共空間分離型Ⅵ鉄道工業用地隣接型Ⅶ中央帯公共施設型Ⅷ道路型の八つの類型(図4-2)にまとめ、それぞれの特徴を考察した。最後にリーニエ市壁跡地空間の特徴を空間の連続性、場所性、利用の多様性、そして両側都市空間の相異性から評価し、それらの分布をまとめた。

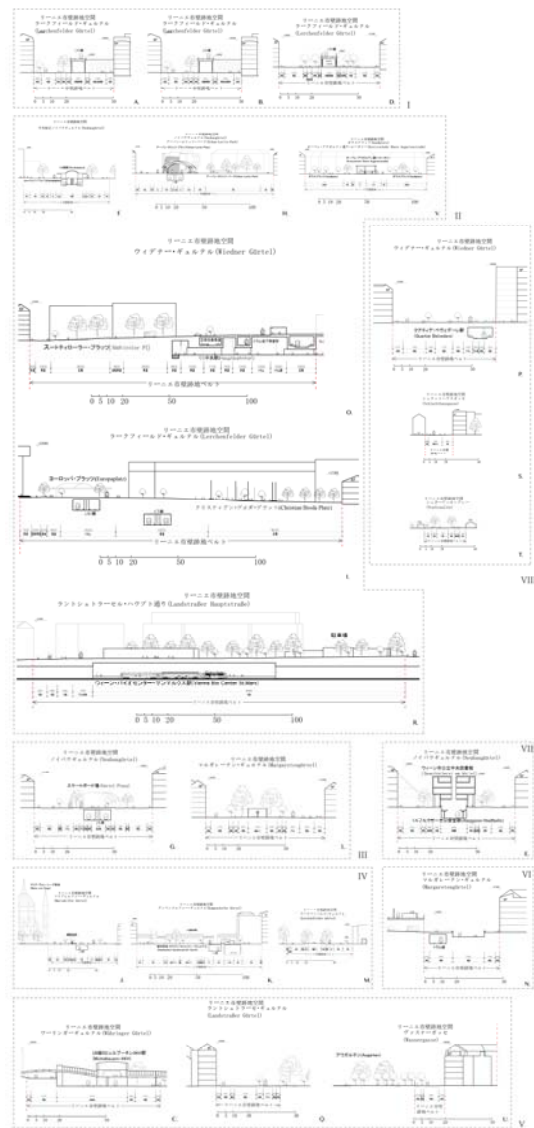


図 4-2 リーニエ市壁跡地空間の分類図

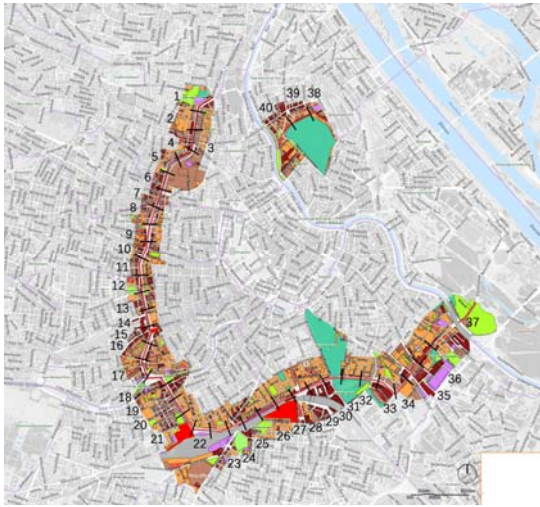


図 5-1 リーニエ市壁跡地沿線用途ゾーニング図

## 5. リーニエ市壁跡地空間の統計分類

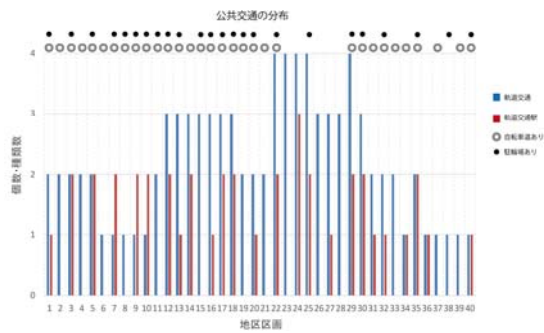
リーニエ市壁跡地沿線の用途ゾーニング図(図 5-1)を作成。視対象が人の場合、近距離景と中距離景の区分指標である 300m を単位長さとして用い、リーニエ市壁跡地ベルトを 40 区間に区分し、区間ごとにベルト両側隣接空間の用途、ベルト上の機能と空間形態、ベルト両側のアクセス性に関する調査データの統計分析を行う。それぞれの項目の分布や割合を明らかにし、その結果に基づきクラスター分析を行った結果、特徴傾向の似ているリーニエ市壁跡地空間を 7 グループに類型化した。各グループの特徴を踏まえた上、ベルト上の空間と両側隣接街区との関連性や広範囲な都市区域との繋がりは最も決定的な指標であることが分かった。これ等グループの分布からリーニエ市壁跡地ベルト全体の都市骨格としての役割分布をまとめ、ウィーンの市街地変容から見た分布の要因を考察した。



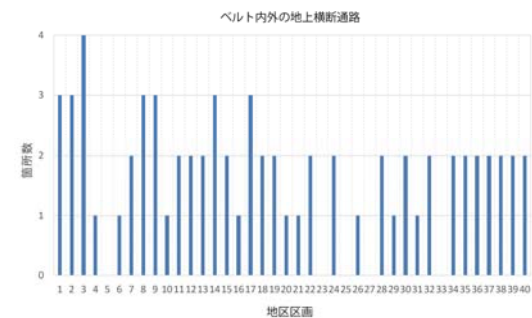
図 5-2 外側隣接空間用途の割合 図 5-3 内側隣接空間用途の割合



図 5-4 ベルト空間の形態の割合 図 5-5 道路空間の種類の割合



▲表 5-1 公共交通密度と自転車専用施設▼表 5-2 地上横断通路分布



## 6. まとめ

西ギョルテル区間のリーニエ市壁跡地ベルトは沿線の交通流に偏る線的な都市骨格ではなく、中央帯での空間整備等を通して、断面上横方向の関連性を重視した受け皿的な境界空間を形成している。それに対し南ギョルテル区間のベルト周辺は近代以来市壁外での鉄道整備の歴史から、今や 19 世紀末までに形成したウィーンの市街地の中で有数の大規模再開発のできる場所となった。

<参考文献>

- 1) 吉崎真人 木多道宏 吉岡聡司 張海燕, 中東欧の近代都市建設と都市計画に関する研究その 1—ブダペスト、プラハ、ウィーンの都市拡張と都市改造—, 平成 23 年度日本建築学会 近畿支部研究発表会
- 2) Lichtenberger, Elisabeth Wien Prag Metropolenforschung, Boehlau (1993)
- 3) Petrovic, Madeleine and Dieter Nagl Der Wiener Gurtel Wiederentdeckung einer Prachtstrasse, Chritian Brandstatter Verlag, 2009
- 4) Hauer, Friedrich (2010) Die Verzehrungssteuer 1829–1913 als Grundlage einer umwelthistorischen Untersuchung des Metabolismus der Stadt Wien, Social Ecology Working Paper 129